

カンガルー日和

柵の中には四匹さくのカンガルーがいた。一匹が雄で一匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供である。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともとたいして人気のある動物園でもないし、おまけに月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数の方がずっと多い。

我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべきものなんて何も思いつかない。

我々は一ヶ月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一ヶ月間、カンガルーの赤ん坊を見物するに相応しい朝の到来を待ち続けていたのである。しかし、そんな朝はなかなかやつてはこなかつた。ある朝には雨が降つていた。次の朝にもやはり雨は降つていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間は嫌な風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が区役所に出かけねばならなかつた。

そんな風にして一ヶ月が過ぎた。

一ヶ月なんて、まつたくのところ、あつという間に過ぎてしまう。この一ヶ月のあいだいつたい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやつたような気もするし、何もしなかったような気もする。月末になつて新聞の集金人がやつてくるまで、一ヶ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかつた。

しかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はやつてきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和であることを一瞬のうちに確認した。我々は顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除け帽をかぶつて家を出た。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊は生きているかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だつて死んだつていう記事が出ないもの」

「病気をして、どこかに入院したかもしれないわよ」

「それでも記事は出るさ」

「ノイローゼにかかるて奥にひつこんでるんじゃないから」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてとじこもつてるんじゃない

いかしら

女の子というのは実際にいろんな可能性を思いつくものだと僕は感心する。

「なんだか、この機会を逃すと二度とカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことがある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないよ」

「だから私は心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりかもしれないけれど、僕はキリンのお産だつて見たことないし、鯨が泳いでいるところだつて見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるのだろう

う

「カンガルーの赤ちゃんだからよ」と彼女は言つた。

僕はあきらめて新聞を眺める。これまで女子と議論して勝つたことなんて一度もない。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼（あるいは彼女）は新聞の写真で見たよりずつと大きくなつていて、元気に地面を駆けまわつていた。それはもう赤ん坊というよりは小型のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じやないみたい」

赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「もつと早く来るべきだつたのよ」

僕が売店まで行つてチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻つてきた時、彼女はまだ柵にもたれてじつとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じやないのよ」と彼女は繰り返した。

「そう?」と言つて僕はアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だつて赤ん坊ならお母さんの袋に入つてるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。

「でも入つてないもの」

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにわかつた。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能

が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱(えさばこ)の中の緑の葉をじつと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらが母親だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言つた。

「うん」

「とすると、母親じやない方のカンガルーはいつたいなんだ?」

わからない、と彼女は言つた。

そんなことはおかまいなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだつた。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ嚙(かじ)り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちよつかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら?」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵? どんな敵?」

「人間だよ」と僕は言つた。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物図鑑でカンガルーについての何もかもをきちんと調べてくるべきであつたのだ。こうなることははじめからわかっていたのだから。

「一ヶ月か一ヶ月、そんなものだろうな」

「じゃあ、あの子はまだ一ヶ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言つた。「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」

「そうだね」

「ドラえもんのポケットつて胎内回帰願望なのかしら？」

「どうかな」

「きっとそうよ」

日はすっかり高くなっていた。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえ

てくる。空にはくつきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる?」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言つた。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでステイービー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄つてくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は「ほら」と言つて一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入つたわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さな尖つた耳と尻尾の先端だけがぴょこんと上にとび出していた。

「重くないのかしら?」

「カンガルーは力持ちなんだ」

「本当?」

「だから今まで生き延びてきたんだ」

母親は強い日差しの中で汗ひとつかいてはいなかつた。青山通りのスー

パー・マーケットで昼下がりの買物を済ませ、コーヒー・ショッピングでちょっと一服しているといった感じだ。

「保護されているのね？」

「うん」

「寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符を捲し求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となつて時の流れに体を休め、ミステリアスな雌カンガルーは尻尾の具合を試すように柵の中で跳躍を繰り返していた。

久し振りに暑い一日になりそうだつた。

「ねえ、ビールでも飲まない？」と彼女は言つた。

「いいね」と僕は言つた。